

令和元年6月12日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16672

研究課題名(和文) 正本芝居噺の記録・保存と調査・研究

研究課題名(英文) Record, preservation, investigation and study of Shouhon-shibai-banashi

研究代表者

宮 信明 (Miya, Nobuaki)

早稲田大学・坪内博士記念演劇博物館・講師(任期付)

研究者番号：50636032

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：現在、正本芝居噺のほぼ唯一の継承者である林家正雀師による正本芝居噺映像記録会を、東京文化財研究所において開催した。正本芝居噺を継承・研究する上での必要な基礎資料を作成しえたことは、本研究の大きな成果である。記録会が一般に公開されたことは、芸能を記録するという側面からも、成果を広く発信するという観点からも、非常に意義深い試みであったといえよう。また、速記や点取り(覚書)、草双紙、キッカケ帖などの文字テキストを比較考察することで、正本芝居噺の特徴(話法や演出、様式など)を正確に把握した。さらに、三遊亭円朝以降の正本芝居噺の系譜についてオーラル・ヒストリーを収集し、文字資料の空白を埋めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行課題である「正本芝居噺と素噺の比較研究」で作成した「真景累ヶ淵 お累の婚礼」「真景累ヶ淵 水門前の場」「鯉沢」「双蝶々雪の子別れ」に加えて、「粟田口霏笛竹 国府台の場」「怪談牡丹燈籠 幸手堤の場」「お藤松五郎」「真景累ヶ淵 深見新五郎 松倉の捕り物」「戸田の渡し」「名月若松城」「引窓与兵衛」「芝居風呂」「名月若松城」の映像記録を作成した。結果、計12本の正本芝居噺の映像を記録・保存するとともに、調査・研究することができた。今後、これらの成果は正本芝居噺を継承・研究する上での重要な基礎資料となるだけでなく、寄席芸能における下座音楽や舞台美術に関する基本的な知見ともなるだろう。

研究成果の概要(英文)：Recording of shouhon shibai banashi is currently held at Independent Administrative Institution National Institute for Cultural Heritage, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties by Shojuke Hayashiya who is almost the only successor of this particular performing art. It was a big achievement in this study to have successfully formed the basic data to succeed and considered the shouhon shibai banashi. It can be said that opening the recording to the public has been a significantly meaningful attempt both from the aspect of recording performing art and in terms of disseminating the achievement widely. The stenography, dictation (making notes) and written texts such as kusazoshi of shouhon shibai banashi were weighed to accurately understand the characteristics of verbal entertainment. In addition, oral histories were collected for the genealogy of shouhon shibai banashi after the times of Encho Sanyutei to fill out the blank on the written documents.

研究分野：幕末・明治期の芸能・文化

キーワード：正本芝居噺 落語 三遊亭円朝 講談 寄席 林家正蔵 怪談噺 大衆文化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 幕末から明治初期にかけて満都の人気を博した正本芝居噺だが、明治2年以降、数度にわたって出された「音曲物真似」「歌舞伎同様ノ所作」の禁止を含めた市中寄席取締に関する布告や、「依然と昔を守り花美なる事を演じなば人の笑種とやならん」(「三遊亭円朝の履歴」)といった芸人たちの意識の変化により、徐々に廃れていく。現在では演じる者もほとんどなく、林家正雀師が唯一の継承者といってよい状況である。こうした正本芝居噺の現状から、その記録・保存は急務であるといわねばなるまい。

(2) 落語史の通説が教えるところによれば、正本芝居噺から素噺(長編人情噺)への移行があり、さらに長編人情噺によって培われた人物描写や風景描写を消化吸収したことにより、それまでの表層的な笑いの落とし噺から、近代的な滑稽噺=落語が誕生したという。つまり、正本芝居噺を研究することで、歌舞伎と広義の落語(正本芝居噺、長編人情噺も含む)との影響関係、正本芝居噺から素噺(長編人情噺)さらに落語への方法論的な展開、の一端を明らかにすることができるのである。にもかかわらず、これまでの落語研究史において、正本芝居噺は等閑に付されてきた。同時代資料の乏しさも災いしてか、正本芝居噺の研究は同時代の芸能研究のなかでももっとも立ち遅れた分野になってしまっている。

(3) 研究代表者はすでに正本芝居噺に関するいくつかの研究業績を有している。また、平成25年度から平成26年度にかけて計4回の正本芝居噺映像記録会を東京文化財研究所において開催し、研究成果を公開するとともに、正本芝居噺の記録・保存に努めてきたが、それはまた正本芝居噺の記録・保存と、それに関わるオーラル・ヒストリーの収集が、今後も継続的に取り組むべき課題であると、あらためて痛感させられる結果ともなった。そこで、これまで蓄積してきた研究の反省点を踏まえつつ、正本芝居噺を記録・保存するとともに、下座音楽や舞台美術など、より多面的に正本芝居噺を考察したい。

2. 研究の目的

本研究は、研究代表者が平成25年度から平成26年度にかけて行なった科学研究費助成事業 若手研究(B)「正本芝居噺と素噺の比較研究」を発展させたもので、正本芝居噺(道具入り芝居噺)によりいっそう焦点化して、その記録・保存と調査・研究を目指すものである。具体的な研究目的は以下の3点である。

(1) 現在、廃絶の危機にある正本芝居噺を記録・保存するために、東京文化財研究所において林家正雀師による正本芝居噺映像記録会を開催する。それによって、いま現在、高座にかけることが可能な演目を特定するとともに、道具(舞台美術)の残存状況、下座音楽の伝承、台詞や演技の工夫等々、正本芝居噺の現状を把握する。

(2) 三遊亭円朝から三遊亭一朝を介して八代目林家正蔵(のちの彦六)そして正雀師へと伝わった正本芝居噺が、その伝承の過程でいかに変容したのか、あるいはしなかったのかを、速記本や点取り、キッカケ帖を中心とした文字テキストの読み込みによって明らかにする。また同時に、実際の上演に携わった演者や下座、後見や道具方に対する聞き取り調査を実施し、オーラル・ヒストリーを収集することで、文字資料の空白を埋め、正本芝居噺の系譜について、その実相を明らかにする。

(3) (2)の調査結果を踏まえて、円朝、一朝、正蔵、正雀それぞれの演者における正本芝居噺の特徴、たとえば地の文と会話文の比重、正本芝居噺では省略されることの多い心理描写の多寡、芝居がかりの場面における役者の身振り物真似の有無、芝居がかりになったあとの台詞の文言などについて、正確に記述する。

3. 研究の方法

(1) 正本芝居噺を記録・保存するとともに、研究成果を広く一般に公開するために、東京文化財研究所において年度ごとに2回のペースで、林家正雀師による正本芝居噺映像記録会を開催する。現在にまで伝承された正本芝居噺の記録・保存を実施することで、その特徴(話法や演出、様式など)や伝承の過程をより明確にする。

(2) 速記本や点取りと呼ばれる演者自筆の覚書、また八代目林家正蔵が下座や黒衣のために用意したキッカケ帖などを中心に、文字テキストの分析を行うとともに、当時の新聞や雑誌、単行本を博捜することによって、いまだ報告されていない同時代の証言を発掘する。文字テキストの考察と同時代評の検討、実際の高座の分析を総合して検証することで、正本芝居噺の特徴をより明確にするるとともに、その系譜と変容の過程を正確に把握する。

(3) 林家正雀師(噺家)や田中ふゆ氏(下座・三味線)林家彦丸氏(噺家)古今亭志ん吉(噺家)山本進氏(芸能史研究家)などの実際の上演に携わった演者や下座、後見や道具方に対する聞き取り調査を行う。八代目林家正蔵の正本芝居噺や、またその正蔵に芝居噺を教えた

三遊亭一朝の高座、さらに一朝・正蔵から口承された三遊亭円朝の芝居噺についてオーラル・ヒストリーを収集し、文字資料の空白を埋める。

(4) 昭和45年2月から隔月で計6回、神田岩波ホールを会場に開催された「芝居噺 林家正蔵の会」の記録映像12演目が、16mmフィルムに残されている。このオリジナルの16mmフィルムをデジタル化し、検証することで、道具の設営・撤去の様子、開演前の稽古の模様なども含め、八代目林家正蔵の高座の実態を解明するとともに、正本芝居噺の伝承の過程における、下座音楽や舞台美術の変容についても明かにする。

4. 研究成果

(1) 正本芝居噺を記録・保存するとともに、研究成果を広く一般に公開するために、東京文化財研究所において年度ごとに2回のペースで、正本芝居噺の現在唯一の継承者である林家正雀師ご協力のもと、正本芝居噺映像記録会を開催した。平成27年度は、6月9日(火)に「粟田口霽笛竹 発端」(素噺)と「粟田口霽笛竹 国府台の場」(正本芝居噺) 11月24日(火)に「田能久」(素噺)と「怪談牡丹燈籠 幸手堤の場」(正本芝居噺) 平成28年度は、6月14日(火)に「四段目」(素噺)と「お藤松五郎」(正本芝居噺) 12月6日(火)に「不孝者」(素噺)と「真景累ヶ淵 深見新五郎 松倉町の捕り物」(正本芝居噺) 平成29年度は、9月19日(火)に「中村仲蔵」(素噺)と「戸田の渡し」(正本芝居噺) 12月22日(金)に「大仏餅」(素噺)と「名月若松城」(素噺)「引窓与兵衛」(正本芝居噺) 平成30年度は、6月13日(水)に「藁人形」(素噺)と「芝居風呂」(ハメモノ入り) 12月5日(水)に長谷川伸作「旅の里扶持」(素噺)と「名月若松城」(正本芝居噺)の映像記録を作成した。この結果、先行課題である科学研究費助成事業 若手研究(B)「正本芝居噺と素噺の比較研究」で作成した「真景累ヶ淵 お累の婚礼」「真景累ヶ淵 水門前の場」「鯉沢」「双蝶々雪の子別れ」に加えて、新たに8本、計12本の正本芝居噺の映像が記録・保存されることとなった。今後、これらの映像資料は正本芝居噺を継承・研究する上での重要な基礎資料となるだけでなく、寄席芸能における下座音楽や舞台美術に関する基本的な知見ともなるだろう。また、研究協力者の飯島満氏(東京文化財研究所無形文化遺産部 部長)のご尽力により、記録会が一般に公開されたことは、芸能を記録するという側面からも、成果を広く公開するという観点からも、非常に有意義な試みであったといえる。なお、本研究で作成した映像記録については、その成果を広く社会・国民に発信するために、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館のAV資料閲覧室および東京文化財研究所の資料閲覧室で所蔵・管理し、利用希望者の閲覧に供している。

(2) 速記本や点取りと呼ばれる演者自筆の覚書、八代目林家正蔵が下座や黒衣のために用意したキッカケ帖などを中心に、文字テキストの分析を行うとともに、当時の新聞や雑誌、単行本を博捜することによって、同時代の証言を数多く発掘した。さらに、文字資料だけでなく、浮世絵や挿絵、寄席ピラ等の絵画資料の調査・分析を行い、新たな資料を発見した。また、正本芝居噺には欠かすことのできない寄席囃子の歴史や囃子方の資料調査にも着手し、文字テキストの考察と同時代評の検討、実際の高座の分析を総合して検証することで、正本芝居噺の特徴をより明確にするとともに、その系譜と変容の過程を正確に把握することができた。なお、平成28年10月1日(土)から平成29年1月18日(水)にかけて、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館で開催した企画展「落語とメディア」においても、正本芝居噺や怪談噺について、その研究成果の一部を公開した。

(3) 林家正雀師(噺家)を中心に、正本芝居噺に関するオーラル・ヒストリーの収集を行うとともに、田中ふゆ氏(下座・三味線)など実際の上演に携わった演者や下座、後見や道具方の方々を対象に、より広範囲に聞き取り調査を実施した。たとえば、「真景累ヶ淵 水門前の場」の土手の甚蔵が水門から出てくる場面における、円朝から一朝に伝わった演出と八代目林家正蔵が取った演出の違いが、オーラル・ヒストリーを収集することで詳らかになったように、聞き取り調査を行うことによって、文字資料の空白を埋め、円朝、一朝、正蔵、正雀それぞれの演者における正本芝居噺の特徴(話法や演出、様式など)を明らかにした。また、円朝から一朝、八代目正蔵、そして正雀へと伝わった正本芝居噺が、その伝承の過程でいかに変容したのか、あるいはしなかったのかを検証するとともに、道具(舞台美術)や下座音楽の伝承についても、文字資料に残らない知見の数々を獲得することができた。

(4) 昭和45年2月から隔月で計6回、神田岩波ホールを会場に開催された「芝居噺 林家正蔵の会」の記録映像12演目のデジタル化、およびその検証については、オリジナルの16mmフィルムの現所蔵者が多忙ということもあり、研究に着手することができなかった。ただし、その代替課題として、昭和49年から昭和51年にかけて朝日放送(ABC テレビ)で放送された『米朝ファミリー和朗亭』において八代目林家正蔵が演じた「引窓与兵衛」の映像を入手し、その映像を分析することで、八代目正蔵の正本芝居噺について、その舞台美術や下座音楽も含めて検証した。また、大阪府立上方演芸資料館(ワッハ上方)や大阪府立中之島図書館、富士正晴記念館において資料調査を実施し、上方の芝居噺と江戸の芝居噺の比較研究にも着手した。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

宮信明、從「日常」到「非日常」 寄席的「近代化」與技藝之變化 、戲劇學刊、查読有、29卷、2019、pp.37 - 60

宮信明、三遊亭円朝と民衆世界、民衆史研究、查読有、第96号、2018、pp.79 - 85

宮信明、本当に怖い三遊亭圓朝、東京人、查読無、通巻400号、2018、pp.52 - 56

宮信明、庶民の記憶と心性、図書新聞、查読無、3345号、2018、p.4

宮信明、「落語とメディア」展を終えて、日本芸術文化振興会ニュース、查読無、通巻587号、2017、p.7

〔学会発表〕(計17件)

宮信明、寄席芸能と美術、UENOYES 寄席、2019

宮信明、「旅の里扶持」と「名月若松城」について、正本芝居噺映像記録会、2018

宮信明、從「日常」到「非日常」 寄席的「近代化」與技藝之變化 、2018 東亞大戲劇國際學術研討會：流行的生成與變動、2018

宮信明、寄席と寄席の一日、MYOKO PAVILION、2018

宮信明、落語文化の変遷と現在の落語事情、公益財団法人としま未来文化財団、2018

宮信明、落語の特徴と現在、MYOKO PAVILION、2018

宮信明、「芝居風呂」と「藁人形」について、正本芝居噺映像記録会、2018

宮信明、「引窓与兵衛」について、正本芝居噺映像記録会、2017

宮信明、大塚と落語 大塚鈴本と正岡容、そして桂米朝、公益財団法人としま未来文化財団、2017

宮信明、「戸田の渡し」について、正本芝居噺映像記録会、2017

宮信明、落語入門、MYOKO PAVILION、2017

宮信明、「深見新五郎 松倉町の捕り物 」について、正本芝居噺映像記録会、2016

宮信明、落語とメディア、臨床文学教育研究会、2016

宮信明、「お藤松五郎」について、正本芝居噺映像記録会、2016

宮信明、落語の話法とその変遷、臨床文学教育研究会、2016

宮信明、「怪談牡丹燈籠」について、正本芝居噺映像記録会、2015

宮信明、「栗田口霏笛竹」について、正本芝居噺映像記録会、2015

〔図書〕(計3件)

Sakae MURAKAMI -GIROUX、FUJITA Masakatsu、Virginie FERMAUD、MIYA Nobuaki 他、MA ET AIDA Des possibilités de la pensée et de la culture japonaise、Philippe Picquier、2016、

宮信明、落語とメディア、早稲田大学演劇博物館、2016、

宮信明、円朝の話芸を求めて、円朝全集 第13巻「月報」、岩波書店、2015、pp.3 - 7

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：飯島満

ローマ字氏名：IIJIMA Mitsuru

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。